

書写論の成立 原 子朗

書写論——というのが成立しないものだろうか。あるいは筆写論といってもよいのだが。これは古典を味わい、批評分析するときの一つの方法として、ずいぶん前から私の考えていることである。実は三十年くらい前からそのことを考えているのだが、才能がないばかりにまともに取組めないでいる、あるいはそこまで手がまわらないのである。

書写論というのは早い話がこうである。たとえば日本語の文章表現では正書法（オソグラフィ）は未確立だが、句読法（パルクチュエイション）にいたってはひどく曖昧で出たとこ勝負、せいぜい読みやすくということをやメドにして句点や読点を打つ。古典の原典で句読点が見えるのは江戸

期以後で、それ以前のは例外をのぞいてほとんどないといってよい。というのは、どうやらたとえば漢文訓読のための教育的配慮の影響や、板本や活字本の出現によってマルやテンの必要が生じてきたのだろうと、ざっと私は考えている。文章伝達もっぱら毛筆手がぎにたよっていた時代には、しかしそんなものは要らなかつた。それはなぜかと考えるまでもない。漢字まじり仮名がき（調和体）あるいはすべて草仮名体の場合、一字々々離して書くことはいないから、文字のつづけさま（連綿法）によって、そして墨色（濃淡や墨つぎ）の加減によって、先ず一見して句読法は明らかだからである。かりに一字ずつ離して書いてあったとしても、字間のあけ加減によっ

て（これは現代人も手紙などで思わずやっているが）明らかである。

板本や活字のないころの昔の人たちは人間が上等であったから、歌など書くときはことに、たとえば「はるかすみ」などと書くときは、黒くろと肉太になど書かず、おのずからかすませて、筆が墨をまだかなりふくんでいるときも、か細く書いた。しかも見苦しい濁点など打たず、あくまで自然に、さながらはるがすみを紙上にただよわせた。ゆめは淡く、うつつは濃く、といったふうだ。これはあくまで基本的なたしなみをいっているのだが、要するに文学は美術でもあって、内容的な歌ごころは、かたちとしての遠近法にも及んでいた。

そんなたしなみの世界ではマルやテンやカッコなどの下等な記号は汚物に等しい。現代の活字本の古典は、活字ゆえに、そうした汚物なしには成立しない。原典のこまやかな息づかいと視覚的な美の思想を抹殺し、いかにも近代的な読みかたで勝手にテン・マル・カッコをほどこし、そして作品の思想などをうんぬんしている。かたちをぬきにして思想などがあろうか。

近松門左衛門が、たぶん節まわしのためであろう、自作の浄瑠璃にせつせと句読点を打っていた。それを見た数珠屋が「漢文ならいざ知らず、浄瑠璃に句読点があるんですかね」といった。近松すかさず「二つにをりてくびにかける数珠」を作つてこいと紙に書いて命じた。数珠屋大いに迷つたあげく、二重に曲げて、首に掛ける数珠を作つていった。すると近松「二重に曲げ、手首に掛ける」のをわしは注文したのだ、といつておし返した……という有名な逸話を、私も小学生のころ教室で教わつた。

どうやらこの話、句読点の大事さを説く国語の時間のための教訓くさいと私はにらんでいる。真偽のほどは知らないが、わが書写論にてらせば、それは活字教育のためには必要でも、活字のなかつたみやびの世界ではナンセンスにちかいかい。美しい毛筆の筆蹟では「くび」か「てくび」か一目して明らかだからである。美しく明らかだからである。たとえば「くび」に掛けるのなら上の「て」は「をり」に、なんらかのかたちでつながつており、「てくび」なら、「て」で墨が継がれるか起筆の跡があるのは

ずだ。すなわち字の大小・濃淡・続けざまによつて一目瞭然のはずである。少なくとも「て」がぼつねんと上下いずれにも属さずそこにあるということはないであろう。

かくして、句読法にかぎらず、わが書写論は句のすがた、文のかたち、歌や物語の発想、成立にかかわる。そして、いささか調子づいていえば、ことごとく近代活字文化やいわゆる個性主義の近代文学のかたなで、それらをあざわらうような超個性的なみやびの世界を構成してゆく。あてがわれた紙数が少ないのでくわしくいえないが、超個性的とは二重の意味でそうなのだ。書写の筆蹟がめざましく美しく造型的で、しかもナマで最も個性的であるという意味とそれゆえに近代的な個性主義以前の、はるかにそれを超えるものをもつているという意味と。

現代人は肉筆が見るにたえないみだらな悪筆だからか、機械的で無性格な活字を好む。そのくせ文体の個性を主張する。かたちを消して、かたちを主張する。近代活字文化の繁栄と墮落は、そうした矛盾と背理の上にいとなまれてきた。作品の解釈と鑑

賞は、しよせん誤解と偏見によつて成りたつとはいへ、活字のなかつた時代の古典のすがたかたちを、活字の中に解体させ、現代ふうに残んでしまふ文化の退廃を、どんなにか私たちは促進させてきたことか。

書写論にちなんでいうと、音読論というのがある。たとえば玉上琢弥氏の主唱される物語音読論というのがそれだが、源氏物語は宮仕えの古女房たちが思い出を事実や虚構をまじえて語るのを筆録編集する女房がいて、さらにそれを読みあげる女房がいる見地に立つて、物語を読むときは近代的解釈や分析にとらわれずに、まっすぐに作品にむかい、音読して味わえというのが玉上氏の意見である。私のいわゆる書写論はこの音読論に影響されたものではないが、玉上氏の意見は私には刺激的である。

音読もされたにちがいないが、それは筆録され、さらに筆写され、筆写されて、多くの歌や物語は美しくつむがれていったのである。